
ヘタ鬼 ~トリップ!!皆で脱出しちゃうね。~

翠風

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタ鬼 ～トリップ！！皆で脱出しようね。～

【NZコード】

N8761Y

【作者名】

翠風

【あらすじ】

『液晶退けえええ――――――』

【ヘタ鬼】の動画を見ていた二人の少女、黒羽とホワイト。二人は【ヘタ鬼】の世界にトリップして、皆を助けたいと望んでいた。そんな彼女達の前に突然、彼くが現れる。彼くは彼女達に「皆を助けて欲しい。」と頼み、二人はその頼み事を引き受ける。

『『大丈夫。』』

『安心して下さい。私達が輪廻を終わらせます。』

『僕達に任せてよ もう、巻き戻させたりしないから』

果たして、イレギュラーである一人の少女は、歪んだ空間から皆を救い出しが出せるのか？

プロローグ ～『液晶、そこを退け！！』～

日本のどこかの家

パソコンの画面を食い入るように見つめる一人の少女がいた。
どうやら、何かの動画を見ているようだ。

？？『
.....うわあああ——ん！——！

？？『！？（ビクッ』

突然、黒髪の少女がパソコンに向かって叫び始めた。いきなりのことにつぶやく白髪の少女は驚き、ビクリと大きく肩を震わせた。

？？『ちよ、ちよっとホワイト、気持ちは分かるけど落ち着いて。』

1

？？『黒羽……。だつて……だつて――――――！（泣』

白髪の少女…黒羽は黒髪の少女…ホワイト・フェザーことホワイ

トを宥めるが、ホワイトは尚も泣き叫んだ。

ホワイト『僕の力を使えばトーネもジキを倒せるかもしれないのに
…………わあ————やつぱり液晶退け————！璧を助け
るんだ————！（泣）』

黒羽「…私も同じ気持ちだよ。皆さんを助けられるなら助けたい…。」

1

そう言つと黒羽は視線をパソコンの画面へと戻し、とても哀しそうな顔をした。

の画面に戻し…

ホワイト『うわああーーん！！』

また泣き始めた。

黒羽『……………グスツ。』

さつきまで我慢していた黒羽もつられて泣き始めてしまった。

現在、黒羽とホワイトは【ヘタ鬼】の動画を見ている。

黒羽『……でも、ホワイトの言つ通り液晶が退いてくれたら良いの
にね……』

黒羽はポツリと呟いた。すると…

？？「……助……やつて……れ。」

二人『『！？』』

どこのからともなく、声が聞こえてきた。

黒羽『…今、何か聞こえた？』

ホワイト『黒羽にも聞こえた？…つてことは僕の気のせいじゃない
んだね…。でも、一体どこから？』

？？「…！」だ…。』

二人『『！？！？』』

一人で首をひねつていると、また声が聞こえてきた。
そして一人は声のする方…パソコンの方に顔を向けた。するとそ

「ひむか…

黒羽『えつー？…君は…』

ホワイト『神聖ローマー？…』

パソコンの画面に映っていたのは【ヘタリア】の登場人物で、消えてしまつたはずの少年…神聖ローマだった。

黒羽『どうして神聖ローマ君がここに？』

黒羽はパソコンの画面に神聖ローマが現れたことに驚きながらも、至つて落ち着いた口調で聞いた。

神聖ローマ「…お前達に頼みがある。」

ホワイト「…なあに？」

「いつもと違い、真剣な表情をするホワイト。黒羽も神聖ローマをじっと見つめる。

神聖ローマ「…イタリアを…皆を…助けてやつて欲しいんだ。」

二人『『いい（です）よ。』』

神聖ローマ「…？」

あまりにも返事が速かつたので、神聖ローマ驚いていた。

神聖ローマ「本当にいいのか？」

ホワイト『だつて僕達、皆を助けたいんだもん。ね、黒羽？』

黒羽『うん。それにわざその話をしたばっかりだし…』といふが、
神聖ローマ君は私達がイタリアさん達を助けたいって話をしてたか
ら来てくれたんでしょう？』

神聖ローマ「…ああ、そうだ。」

黒羽の言葉に神聖ローマは少し苦い顔をしながら頷いた。

ホワイト『じゃあ、早速行こ（黒羽『あつ…』）』

黒羽は何かを思い出したよつて大きな声を出し、俯いた。

ホワイト『どうしたの…』黒羽…』

黒羽『いや、その…。』

ホワイト『？』

黒羽『私…戦えるかな？』

ホワイト『あ…。』

ホワイトも『やつらば』と、困ったような表情をした。

黒羽『ホワイトは魔法を使えるし、戦いにも慣れてるけど、私は…。』

神聖ローマ「それなら、問題無い。」

黒羽『え…。』

神聖ローマ「俺が力をやる。やつすれば、お前も（黒羽）黒羽。』
？』

黒羽『私のことは黒羽、って呼んでいいよ。（ニコニ）』

ホワイト『僕はホワイト、でいいよ。』

神聖ローマ「…分かった…話を戻すぞ。俺が力をやれば、
黒羽も魔法を使えるようになるし、武器なんかを使って戦えるよ

にもなる。』

黒羽『へえ……ありがとう。神聖ローマ君は凄いんだね。』

神聖ローマ「いや、別に……。それに礼を言つのは俺の方だ。こんな無茶苦茶な願いを聞いてくれて……本当にありがとう。』

神聖ローマはペロリと頭を下げた。

二人（／＼／＼かわいい……。）

見たことのない神聖ローマの行動に一人は小さく感動していた。

ホワイト『ねえねえ、神聖ローマ？』

神聖ローマ「？何だ、ホワイト。』

ホワイト『神聖ローマは僕が何なのか知つてゐる？』
神聖ローマ「……知つてゐる。』

ホワイト『ふうん……そつか……ならいいや。』

黒羽『ホワイト。』

少し、沈黙が続く。

神聖ローマ「……では、お前達一人を【あの屋敷】へ送るぞ。」

黒羽『うん。』

ホワイト『よしきたー!』

黒羽『ホワイト……それ、漁師さん達が使つ囃子。』（汗）

ホワイト『えへへ……』

神聖ローマ「……Link……offence……」

神聖ローマが何か呪文のような言葉を呟くと、パソコンの画面からまばゆい程の光が溢れだし、黒羽とホワイトを包んだ。そして、光が収まる頃には一人の姿は消えていた。

神聖ローマ「……頼んだぞ、二人とも。」

パソコンの画面はブツツと音を立てて、消えてしまった。

主達を無くした家は静寂に包まれるのだった。

設定（前書き）

主人公達の設定です。なんかもう、無茶苦茶な感じですみません。
。 .

設定

設定

名前：千晶 ちあき 黒羽 くろは

容姿：白い髪に緋色の瞳の少女。髪は肩にギリギリ届くくらいの長さ。

普段は年齢よりも大人びて見えるが、笑うと年齢より幼く見える。可愛い。ホワイト・フェザーと同じ顔をしている。

服装

- ・白のトレーンチコート（丈短め）
- ・黒のショートパンツ
- ・白のブーツ
- ・プレスレット（水晶を抱く黒い竜の形）
- ・胸元に紅い大きなリボン

身長：161・7cm

年齢：16歳（高校1年生）

性格：優しい。落ち着いた雰囲気を持っている。真面目。

1人称：私

その他：話すときは基本、敬語。

ホワイト・フェザーを「ホワイト」と呼んでいる。友達に薦められて【ヘタリア】を知り、ハマった。それから【ヘタ鬼】の動画も薦められて見て、みんなを助けたいと思つてい

た。

頭が良く、スポーツもそこそこできる。

一軒家にホワイトと一緒に暮らしている。家族は皆、他界している。

母親は日本人（黒髪に黒い瞳）、父親はアメリカ人（金髪に瑠璃色の瞳）だった。瞳の色は父方の祖母から遺伝した。昔は黒髪だったが、ある事件でをきっかけにショックを受け、白くなってしまった。

名前：ホワイト・フェザー

容姿：黒い髪に瑠璃色の瞳の少女。髪は長く、ハンガリーくらいの長さ。人間ではないらしく、トリップ前の世界では透けていた。だが、トリップ後は実体を持っている。

可愛い。黒羽と同じ顔をしている。

服装

- ・黒のケープ
- ・深緑のショートパンツ
- ・白のハイソックス（長さは膝上）
- ・深緑のブーティー
- ・ブレスレット（水晶を抱く白い竜の形）

・首もとに紅い小さなリボン

身長・161・9cm

年齢・??

性格・明るい。常にテンションが高い。よくふざける。自分の思っていることははつきり言うタイプ。

1人称・僕。たまに私。

その他・誰に対してもタメ口で話す。

黒羽と一緒に【ヘタリア】や【ヘタ鬼】を見て、自分もハマつた。

「ホワイト・フェザー」という名前は黒羽が付けてくれたと言っている。 魔法を使える。また、戦いの経験があるらしく戦える。強い。

設定（後書き）

次は第一話です。【あの屋敷】に到着します。

第一話 【あの屋敷】へ到着（前書き）

予告通り、【あの屋敷】に到着します。
内容はタイトル通りです。

第一話 【あの屋敷】へ到着

黒羽『…………』

神聖ローマ「起きたか？」

黒羽『…………』

黒羽は神聖ローマの声がすぐ近くから聞こえたので、てっきり隣にでも居ると思っていた。だが、近くに神聖ローマの姿は無かった。

神聖ローマ「右手のブレスレットを見ろ。」

黒羽『え？？？』

黒羽は神聖ローマの指示通り右手に付けたブレスレットを見た。

黒羽『…………』

ブレスレットを見ると、水晶の部分に神聖ローマの姿があった。

神聖ローマ「俺は普段は黒羽とホワイトのブレスレットの水晶の中で一人のことを見守っている。だが、必要なときには力を貸そう。」

黒羽『うん。… その言い方からすると、神聖ローマ君は私達のブレ
スレットを自由に行き来できるの?』

神聖ローマ「ああ……。」

黒羽の問いに、水晶の中で神聖ローマは頷いた。

ホワイト『...アーン...アーリー...?』

先程まで気を失っていたホワイトもようやく目を覚ました。

黒羽『おはよー、ホワイド。』

ホワイト『ハニーチェリーブルーベリー』 黒糸 ... ドルセリーナ

神聖ローマ「3階の図書室だ。」

ホワイト』く~、本当に【あの屋敷】に来たんだね~……で、えつ~?神聖ローマ帝~』

黒羽『ホワイト、左手のプレスレットを見て。』

ホワイト『ヘル?ル、うん。』

ホワイトは黒羽の促すままに左手に付けたブレスレットを見た。

『ホワイト……あつー？ 神聖ローマ……向で水晶の中の面の……？』

神聖ローマはいつの間にか、黒羽のブレスレットからホワイトのブレスレットに移動していた。

神聖ローマ「俺は黒羽とホワイトのブレスレットの中を皿田に行き来できる。」

ホワイト「…………す、」

神聖ローマ「……いや、それほどでもない……。」

ストレートにほめられ、神聖ローマは少し照れた。

黒羽『…………。』

黒羽は一人のやり取りを横目に見ながら、何かをしていた。

『ホワイト……それじゃ早速トーキーもどき退治しようつーつー……』

黒羽『お、おおー……？』

ホワイト『』や、神聖ローマも『』

神聖ローマ」あ、ああ……おお……。「

ホワイト『もー！一人とも元気ないな！』

一人の元気のない「おおー」にホワイトは頬を膨らませた。

黒羽『ごめん、なんかこいついうの慣れなくて…。』

神聖ローマ「：俺もだ…」「

性格が真面目な二人組は苦笑いしながら答えた。

ホワイト『全く...一人とも各自練習しておくれ』』

黒羽『は、はーい。』

神聖ローマ「わ、分かった。」

ホワイト『よろしい じゃ、行くよ。』

そして3人は図書室を後にするのだった。

廊下

ホワイト『そう言えばさー、黒羽…。』

黒羽『?』

廊下を移動中、ホワイトが黒羽に話し掛けってきた。

ホワイト『黒羽、戦えるの？魔法の練習とかしなくて大丈夫？』

黒羽は【この屋敷】にトリップする前はただの女子高生だった。神聖ローマから力を貰つたとはいえ、まだ使つたことはない。

黒羽『大丈夫、さつき練習したし、戦い方も頭の中に入つてゐるから。』

くも無かつた。

ホワイト『いつの間に…?』

黒羽『大体は夢の中。あとはホワイトが神聖ローマ君と話している
やう』

ホワイト『夢の中?』

黒羽『そりだよ。』

神聖ローマ「…とこいつとは上手く行つたつてことか。」

不思議そりな顔をするホワイトに黒羽は笑いかけた。

ホワイト『へ?』

今度は神聖ローマの言葉にホワイトは不思議そりな顔をした。

神聖ローマ「俺が「眠つてゐる間に訓練ができる空間」を黒羽の頭
の中に作つたんだ。なんなら、ホワイトにも作つてやるやうか?」

ホワイト『うん…作つて作つて…!』

黒羽『私の頭の中に戦い方を入れてくれたのも神聖ローマ君だよね
?』

神聖ローマ「そうだ。」

ホワイト『神聖ローマすげー!...よーし、僕も頑張るぞ』

ホワイトは両手をグーにして、上に掲げた。

神聖ローマ「…………すまないが、力を使いすぎて疲れたから俺は少
し休むぞ。」

黒羽『あっ、うん。ゆっくり休んでね。』

ホワイト『お休み』

神聖ローマ「…………。」

黒羽『…眠ったみたいだね。』

ホワイト『だね。』

黒羽とホワイトは顔を見合わせて、笑った。

ギャー……………

ウワー……………

一人『『…………』』

1階の玄関に続く階段へ向かっていると、下から悲鳴が聞こえてきた。

黒羽『ホワイトー…』

ホワイト『うん…!!』

一人は悲鳴のした方へ急いだ。

イタリア side

俺「ハアツ…ハアツ…。」

今、俺は「あこつ」から逃げている。

俺「……全く…しつこにな…。」

周りには俺以外、誰も居ない。
俺は立ち止まり武器を構えた。

俺「…来るんなら来れば?」

そう言つと、あいつは凄い速さで俺に向かって來た。
俺はあいつの攻撃に備え、武器を強く握りしめた。すると…

？？『ていや――――』

キンツ

俺「――？」

突然、後ろから槍を持った黒髪の女の子が現れてあいつに斬りかかった。

俺「えつ……えつ……！？」

？？『うわ……思つてた以上にかたつ……なら……これでどうだ――』

混乱する俺をよそに、その子は槍を（どういう仕組みかは分からぬけれど）大剣に変えて、再びあいつに斬りかかった。

ザクツ

？？『おつ――いけた――』

トニー（？）「グギャ――」

あいつは少し怯んだ。

？？『大丈夫ですか？茶髪のお兄さん。』

俺「えつ！？

気が付くと、俺の隣に立っていた子供たちのうち、白髪の女の子がいた。

？？『……私達に任せて逃げて下せ。』

俺「さ、君達は一体……どうして……ここ……何で……。」

俺が聞くとその子は困ったような顔をして、答えた。

？？『今はまだ言えません。……でも一つだけ言えるのは……。』

私達はあなた方の味方です。

その子は一皿の葉を切り、俺の皿をまっすぐ見つめ、とても優しい笑顔で言った。

俺「どうこう」と、俺達の味方って、君達の面前まへ、びつやつてここに来たの？ねえ！？

？？『…すみませんが強行手段に出させて頂きます…
彼の者を我が意のままに…メニューバー！』

その子が呪文を唱えると、俺はの意思とは反対に走り出し、その場から離れ始めた。

俺「！？何これ！？体が勝手に…？」

？？『私の魔法ですよーー！』

後ろを振り返るとあの子が叫んでいた。

俺「待つて！…まだ聞きたいことが…。」

あの子達の姿がどんどん小さくなつて…。そして、俺の体は廊下を曲がり遂に見えなくなつてしまつた。

三人称 side

黒羽『行つたね。』

ホワイト『うん。』

二人は顔を見合わせ、イタリアが向かつた方向を見ながら呟いた。

二人『大丈夫。』

黒羽『安心して下さい。私達が輪廻を終わらせます。』

ホワイト『僕達に任せてよ もつ、巻き戻せたりしないからさ』

トニー(?)「二ガ、サ...ナイ...。」

黒羽『別に逃げませんよ。』

ホワイト『むしろ、そっちが逃げないでよね』

黒羽は魔導書を、ホワイトは大剣を構えた。
二人の口元には笑みが浮かんでいた。

第一話 【あの屋敷】へ到着（後書き）

第一話は、明日投稿の予定です。
主人公達がトニーもどきと戦います。

閑話 神聖ローマがくれた力について（前書き）

すみません。初めての戦いの前に閑話を入れさせて頂きます。

ホワイトが黒羽に神聖ローマからどんな力を貰ったか質問する話です。

イタリアヒトニー(?)に遭遇する前のijと…

ホワイト『ねえねえ、黒羽。』

黒羽『? 何? ホワイト。』

ホワイト『黒羽はどういう風に戦うの?』

ホワイトは黒羽から、黒羽は神聖ローマから力を貰い戦えるようになったとは聞いたが、具体的にどう戦えるようになつたかは聞いてなかつたことを思い出し、黒羽に質問した。

黒羽『あ… そう言えばまだ説明して無かつたね。』

そう言つと黒羽は懐から紙とペンを取りだし、サラサラと何かを書き始めた。

黒羽『…つと。私の戦い方を簡単にまとめると、こんな感じだよ。』

黒羽は先程何かを書いた紙をホワイトに見せてきた。

ホワイト『どれどれ…』

ホワイトは紙を覗き込んだ。紙には、次のように書かれていた。

- ・戦い方はそのときの「ジョブ」によって異なる。
- ・「ジョブ」とは職業のことである。
- ・「ジョブ」は一度に2つ、掛け持つことができる。
- ・2つの「ジョブ」の組み合わせによつ、新たな「スキル」を使えるようになる。

- ・「スキル」とはジョブ毎に使える特別な技である。
- ・ジョブは「ジョブチエンジ」という魔法で自由に変えられる。
- ・「ジョブチエンジ」だけは、どの職業のときでも使える。

ホワイト…なるほどね~』

ホワイトは黒羽の書いた紙を読み、理解したようだつた。

ホワイト『それで黒羽は今、何と何のジョブを掛け持つてゐるの?』

黒羽『私が今掛け持つてゐるのはウイザード（魔導士）とトイーバ
(歌姫)だよ』

ホワイト『トイーバ?』

黒羽『ディーバつてこつのは、名前通り【歌声】で戦つんだよ。戦

い以外にも、回復や仲間のサポートも出来るんだって。』

ホワイト『わお……で、他にはどんなジョブがあるの?』

黒羽『そうだね…ソードナイト（剣士）やパラディン（聖騎士）、
プリースト（僧侶）、アーチャー（弓手）なんかもあるよ。』

ホワイト『へーーーなら、その場に応じて戦えるんだね。』

黒羽『うん。…ってそれはホワイトも同じでしょ? 魔法使えるし、
武器も自由に出して使いこなせるし。』

ホワイト『ま~ねえ~』

ホワイトは黒羽の言葉に胸を張つて答えた。

ホワイト『けど、やつぱり僕は武器で戦つのに慣れてるから、黒羽
には魔法で援護して貰つていいかな?』

黒羽『いこよ。…とか、今の私のジョブじゃ援護しかできない
から(汗)

ホワイト『んじゃ、よしよし』

ホワイトは右手をグーにし、親指を上に立て一カツと笑いながら
黒羽に向けた。

ギヤ-----!!

ウワ-----!!

二人『『！』』

1階の玄関に続く階段へ向かっていると、下から悲鳴が聞こえてきた。

黒羽『ホワイトー』

ホワイト『うん！』

そして二人は悲鳴のした方へ急ぐのだった。

次こそ、初めての戦いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8761y/>

ヘタ鬼 ~トリップ!!皆で脱出しうね。~

2011年11月27日08時51分発行